

長特研だより 第103号



発行 長崎県特別支援教育研究会
事務局 長崎県立川棚特別支援学校
編集局 長崎県立鶴南特別支援学校五島分校
発行日 平成28年12月22日

第50回 九州地区特別支援教育研究連盟研究大会「佐賀大会」が、伊万里市民センターをメイン会場に平成28年11月17日〔木〕～18日〔金〕にかけて開催されました。今回は、その一部を報告します。

【大会主題】

「生き生きと活動する子どもの育成をめざして」

【大会趣旨】

平成24年7月に中央教育審議会において、「共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進」が報告され、「インクルーシブ教育システム」の考えや、合理的配慮・多様な学びの場の整備・教職員の専門性の向上等の必要性が示された。そのような中、全国的にも特別支援学校の在籍者数は年々増加し、また特別支援学級の数がこの20年で倍増する等、特別支援教育に対するニーズはますます高まっている。

本大会では、九州各県の多くの実践を共有し、語り合い、学び合うことにより課題解決の一助とするとともに、特別支援教育の更なる充実・発展を期する。



<記念講演>

演 題

「子どもの主体的な姿を実現する特別支援教育」
～通常の学級、特別支援学級、そして特別支援学校で～

講 師

植草学園短期大学 教授 佐藤 慎二 先生

【概 要】

I 特別支援教育は何を目指すのか

- 1 社会的な自立を目指す！「特別支援教育とは、障害のある幼児児童生徒の自立や社会参加に向けた主体的な取組を支援する」
 - (1) 通常の教育の単なる下学年対応ではない
 - (2) 社会生活の中で使える力を身に付け、自立と社会参加を目指す
- 2 その子どものよさやできることが発揮される！学校は病院ではない！



- ・できないところを探すときりがなく、治さなければならないことを探すときりがなく
- ・悪いところを治すのではなく、よさ・得意・自分らしさを発揮するために学校に来る
- ・特別支援教育はいいところ、よさに目を向けつつそれを生かして自立と社会参加を目指してほしい

3 問題を減らす発想ではなく、問題を起こしていない状態を増やす逆転の発想！

- (1) 叱って子どもの行動を変えようとする発想を転換する！（力ではなく、本気で叱る場面は大切。特に命等に関わること）
- (2) 子どものよさが発揮される時間、あるいは、問題を起こしていない時間＝頑張っている時間
- (3) 魔法の言葉—問題行動とは逆の行動に注目して、逆の行動を徹底してほめる

4 子どもをほめるために約束をする！

- (1) 問題行動を減らすために約束しない—「～しない」「～してはいけない」という約束はNG
- (2) 問題行動とは逆の行動を増やすために約束する—「～する」「～しようね」という約束で
- (3) その際、すでにできること・できそうなことで約束する！—結果として、ほめる機会を増やす
- (4) ほめ言葉 5 S＝さすが・それでいい・すごい・すてき・すばらしい
 - ・暴言を減らすためには温かい言葉をたくさん使える機会をつくる。

II 知的障害や知的障害のある自閉症の子どもの支援の原則

- 1 社会生活能力と知的能力は一致しない
- 2 生活に即した実際の・具体的活動の重視—知的障害教育・「教科等を合わせた指導」の重視

III 発達障害・「自立活動」を考える

○心理的な安定・人間関係の形成・コミュニケーションの実践例（DVD視聴）

IV 「教科別の指導」のセーフティーネット・ユニバーサルデザイン—通常学級への発信—

- 1 子どもが聞く活動を高める！—視覚的な焦点化を図る—
 - (1) 聞く活動は簡単ではない説明指示の簡潔化「長い説明や指示は外国語の授業のようだった」
 - (2) 表現の適切性「抽象語を少なく具体的に」
- 2 一時一作業の大原則
 - (1) 前置きの指示の重要性—「鉛筆を置く」「黒板見ます」「大事な話をします」など
- 3 子どもが見る活動を高める！
 - (1) 視覚情報は強い！
 - (2) 視覚情報を減らす！
 - (3) 見えない時間の流れの見える化と終点の明確化
- 4 動きは最大の支援

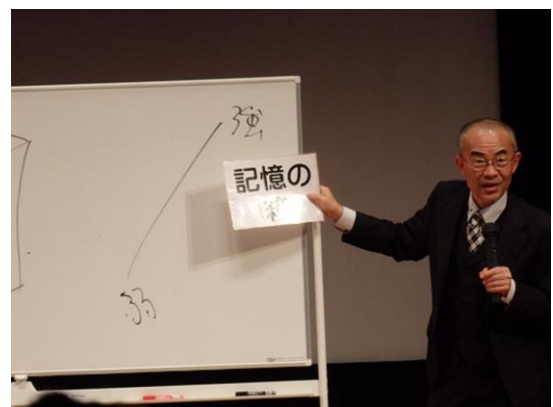
「動くことが得意・動く活動に取り組みたい子どもたちという理解—動的・静的活動の組み合わせ」
- 5 指示・説明・情報ルートの複線化

V 教育課程の実際を考える

- 力をつける教育から力を使いたくなる教育への転換
- 本音で楽しく・やりがいのある活動を！

VI 具体的な支援に徹底してこだわる

- 支援を変えて・子どもを変える
- 人的要因の重要性
- 「物理的要因」と「活動的要因」の重要性



VII 障害のある子どもの保護者との連携協力について

- 1 診断を受ける・特別な支援を受けることが大きなメリットとして感じられる時代へ
- 2 診断は一時の救い・一生の不安
- 3 保護者会等の工夫
- 4 真の連携へ
- 5 「親は一生 教師は一時」「教師の一時は子どもの一時」

大会2日目は9分科会が行われました。そのうち、第2分科会「生活単元学習」と第5分科会「自立活動」の内容を紹介します。

【第2分科会 生活単元学習（生活を豊かにする生活単元学習のあり方）】

提案Ⅰ テーマ 生活を豊かにする生活単元学習のあり方

学校名 佐賀県伊万里市立伊万里小学校

発表者 教諭 樋口 善広、小田 都美子

<公開授業>

知的障害特別支援学級の「2学期の誕生会をしよう！」(全14時間)プレゼント作り、教室飾り作り、バースデイカード作り、誕生会という流れの中で、本時はプレゼントを作ろう(5/6時間)の授業。積極的に自分の役割を果たしたり、友達と一緒に活動したりすることをねらいとし、「友達のことを考えて喜んでもらえるように丁寧に製作する」という目標を掲げ、写真立て作りに取り組んだ。児童9名が発達段階を考慮した二つのグループに分かれ、低学年グループでは飾り作りを、高学年グループではフレーム作りを行い、後半は一緒にペアになって飾りつけていくという共同作業を行った。教材は、主にホームセンターや百元ショップから調達しアイデアを工夫して使用している。

本単元では、将来の生活に必要な力を育てるため、学校だけでなく家庭生活においても取り組める簡単な調理をしたり、会食の準備や後片付けをしたりする活動を取り入れている。

提案Ⅱ テーマ 一年生を中心にした生活単元学習のスタート

学校名 大分県宇佐市立柳ヶ浦小学校

発表者 教諭 衛藤 成美

「学校に行ったら楽しい」「今日も楽しかった」と思えるようにしたい。知的障害特別支援学級：あすなろ学級には、1年生2名、5年生1名が在籍。1学期：買い物ごっこをしよう(校内)、2学期：はじめての買い物学習、3学期：おつかいにいこうというテーマで、買い物学習に取り組んでいる。校内での模擬店での買い物から実際に校外へ出たの買い物、最後はおうちの人から頼まれた商品を理解して、お店で探し見つけ買い物をする展開とした。1年生が買い物をするときは5年生を店員役にして意欲をもたせ、事前にコンビニ内のすべての商品や道順の写真を撮り見通しをもって学習できるようにしている。

交流学級で過ごすことも多いので、生活単元学習は子どもたちが主人公になって活動できる貴重な時間であるため、生き生きと活動できるものを中心に取り組んでいる。

成果として、学習の場を校外に広げられ体験を豊かにすることにつながった。「交流学級の活動や学校行事に向けて」は、あすなろ学級で事前学習を必ず行うことで、活動のイメージをもち意欲をもって参加できるようになった。

提案Ⅲ テーマ 子どもが自ら考え、行動する力を高める生活単元学習の取組
～「合宿をしよう」の実践をととして～

学校名 長崎大学教育学部附属特別支援学校

発表者 教諭 坂田 信吾

小学部1年から6年10名の児童が1泊2日の合宿に取り組む内容。「①校外での身近生活の学習や集団生活をととして、自分で考えたり、行動しようとしたりする気持ちを育てる。②家庭から離れた環境でも落ち着いて自分のことができたり、班の仲間と活動できたりする。」を目標に掲げ、事前学習は2か月前から24時間の計画で実施。ア：合宿について話し合う、イ：オリエンテーリング、ウ：お風呂、エ：荷物出し、荷物入れ、オ：布団しき、カ：カラオケ大会、キ：日程表を見ての活動に分けて行った。手立ても、①子どもたちの楽しみを大事にする、②実態に合った目標や活動を設定する、③考える場面や評価をする場面を設定し課題達成について自己理解させる、④教師は“班活動を生かす班長の支援者”となる、⑤家庭との連携を図る、に留意して取り組んでいる。

合宿を終えると子どもたちは達成感で表情は自信に満ちあふれ、たくましく成長したと感じる。時間への気付きや時間を意識した行動が増えている。今後は、子どもたちがより主体的に活動するための働き掛けやリーダーの役割と在り方を考えていく必要がある。



【指導助言】

助言者 佐賀県嬉野市立嬉野小学校 教頭 光岡 民夫 先生

○生活単元学習と各教科の内容の関連：生活単元学習では生活に根ざした楽しい活動を行い、そのことを通して「力が付いた」姿を目指す。各教科を横断的に学習していくことが大切。

○新学習指導要領で①社会に開かれた教育課程②アクティブラーニング③カリキュラムマネジメントが提案されているが、生活単元学習で行っている実践的・具体的な活動、主体的な学び、仲間と共にする対話的学びが正にアクティブラーニングである。

- ・ 買い物学習は家庭と連携して、とにかく経験を多くさせる。
- ・ 繰り返して行う、工夫して変化させる、学校外での活動を多く取り入れる。
- ・ 自分のことは自分でやる。主体性をもたせ、できたことを自信につなげる。
- ・ ごほうびを計画に仕組むとより輝く（意欲につながる）。

○生活単元学習は、いろいろなことが何でもやれる学習、その魅力は①やりがいのあるテーマ②手応えのある活動③テーマ成就の満足感・成就感④仲間と共にする生活。

【第5分科会 自立活動「生活の質を高めるための目標設定と支援のあり方」】

提案Ⅰ テーマ 児童が、自ら要求などを伝えようとするための指導・支援の工夫
～iPad、写真カード等の活用を通して～

学校名 佐賀県立伊万里特別支援学校

発表者 教諭 高倉 紀子

実践1

○指導目標

- ・遊びや学習をしながら、教師と楽しく関わる。

○指導内容

- ・補助代替コミュニケーションアプリである「ドロップトーク」を用いて、身近な言葉（音声）とシンボルのマッチングをする。
- ・「ドロップトーク」を用いて、教師に挨拶をする。
- ・どんな遊びをしたいか、絵カードなどを用いて教師に伝える。



実践2

○指導目標

- ・自分から要求や思いを伝えることができる。

○指導内容

- ・休み時間に行きたい場所ややりたいことを伝えるために写真シンボルを活用する。
- ・給食時間に要求を伝えるためのシンボルを知り、活用する。
- ・「はい」「いいえ」の意思表示を、身振りで表したり、「ドロップトーク」のシンボルを活用したりする。

【成果】

- ・A児が興味をもっているiPad及び「ドロップトーク」を活用することで、A児の学習意欲を高めることができた。「ドロップトーク」の機能（オリジナルのシンボルを作り、音声を録音する）を活用することで、さらにiPadに興味をもち、積極的に行動したり教師との関わりが見られたりするようになった。
- ・自立活動の時間における指導の中で、教師が積極的にA児と関わるとともに、写真カードや音声を発信できる「ドロップトーク」を活用したことで、A児が教師に対して、要求等自分の思いを伝えようとする意欲を高めることができた。生活場面でも、担任団やあまり関わったことがない教師にも積極的に関わり、要求等を伝えようとする意欲を高めることができた。

提案Ⅱ テーマ 自分の考えを自分の言葉で表現する生徒の育成

学校名 熊本県熊本市立三和中学校

発表者 教諭 奥村 猛

○取組について

三和中学校の特別支援学級（自閉症・情緒障害児学級）では、生徒の実態から自立活動の6区分の中で特に「人間関係の形成」と「コミュニケーション」に関わるさまざまな学習活動（SSTや構成的グループエンカウンター、話し合い活動と作業、カードゲーム「ごん太」「〇〇めくり」「配膳式かるた」等）に取り組んできた。今回は生徒の成長に結びついたと考えられるカードゲーム「ごん太」を中心に発表する。

この「ごん太（『あ』～『ん』までのひらがな1文字の書かれているカードを組み合わせ、ことばを作るゲーム）」の良さは、多くのカードゲームのように「早く上がる（＝手札をなくす）ことで勝つのが楽しい」というよりも、「手札を使ってことばを作ること自体が楽しい」というゲームとして作られているので、ゲームの勝ち・負けをあまり気にすることなく他の生徒たちと言葉やイメージを交流する楽しさを体験することができる（人間関係の形成）ところにある。



【成果】

- ・少人数であっても、ゲームに参加すること自体に抵抗感が大きかった生徒がいたが、「ごん太」を続けることで、次第に少しの支援で、参加することができるようになってきた。（人間関係の形成）
- ・数人で行うこの「ごん太」に、メンバーの変化があっても同じように参加できることで、人間関係が広がり、人間関係の形成が見られるようになった。（人間関係の形成）
- ・クラスの中では発語が難しい生徒が、単語作りに興味をもち、小さい声であるが発語ができるようになった。（コミュニケーション）
- ・「ごん太」のゲームの中で、言葉を作りにくい生徒に、他の生徒が「まちがえてもいいんだよ」「〇〇すれば言葉が作りやすいよ」など、やさしい言葉掛けができるようになってきた。（コミュニケーション）

提案Ⅲ テーマ 人との関わりを広げる ～Y児の「自立活動」を振り返って～

学校名 鹿児島県立武岡台養護学校

発表者 教諭 今関 里美

事例発表 中学部2年生Y児

（1）障害の種類・程度・手帳判定

知的一号、肢体不自由、病弱：てんかん、療育手帳：A1、身体障害者手帳：1種2級

（2）本人・保護者の願い

- ・元気で楽しく学校へ通ってほしい。（健康面に配慮しながら体力をつける）
- ・一つでも一人でできることが増えてほしい。
- ・日常生活動作（食事、排泄、服の着脱、歯磨き）など、自分のことは自分でできるようになってほしい。
- ・良いこと、良くないことが分かるようになってほしい。
- ・落ち着いて行動できるようになってほしい。（安全面の配慮）
- ・コミュニケーション（指示理解力・意思伝達）や友達との関わりが広がってほしい。

（3）支援目標（中学部卒業時）

- ・歩行能力、体力の向上を目指す。
- ・食事や排泄面などの身の処理能力を高める。
- ・いろいろな経験を通して興味の拡大を図る。
- ・して良いことと良くないことの区別ができるようになる。
- ・指示理解を高めるとともにサイン・カードによるコミュニケーションの拡大を図る。
- ・対人関係の拡大を図る。

- ・目と手の協応や集中・持続力を高める。

(4) 平成27年度の重点目標と指導の手立て・経過（抜粋）

①簡単な運動を継続して行い体力を向上することができる。

- 自立活動等で体操や粗大運動を行う。

- ・毎日、学部体力づくりで10分間走に取り組んだ。コースを外れることや座り込むことが少なくなってきた。ジョギング・ウォーキング大会向けのコース（約2km）を教師と一緒に25分51秒で完走することができた。

②手元を見ながら手指を使う活動に集中して取り組むことができる。

- ボタンを押す、書く、制作活動をするなど机上で手指を使った活動を設定する。

- ・自立活動の時間に継続的に取り組むことで、段ボールや紙ヤスリの縦・横のガイドラインを指でなぞることができるようになった。書くことにも興味をもち始め、鉛筆等を持って、なぐり書きや渦巻きが書けるようになってきた。

③落ち着いて学習に参加し、いろいろなものに興味を示し、友達とも関わろうとすることができる。

- いろいろな学習集団（作業、自立活動、学年等）の中で、集団活動を体験し、興味のあるものを見つけたり、友達と関わる機会を設定したりする。

- ・創作ダンス「錦江湾」の学習では、初めは、教師と手をつないで移動したり、ジャンプしたりすることを繰り返し練習した。その後、友達と手をつなぐ練習を繰り返し行うことで、第Ⅲ場面の「楽しい海」を踊ることができた。

【指導助言】

助言者 佐賀県立大和特別支援学校 副校長 園田 泰洋 先生

- 学習指導要領解説自立活動編の解説を何度も繰り返し読んでいくことで自分が担任している子どもに必要なことが見えてくる。

- 自立活動の時間における指導があるところとないところがあり、なくても自立活動の目標を挙げているところと挙げていないところもある。個別の指導計画の中に自立活動の内容を含んだ形で整理している場合、あるいは自立活動の指導計画を書いているいろいろな学校がある。本日のテーマである、「生活の質を高めるための目標設定と支援のあり方」を個別の指導計画の目標設定と考えている人と自立活動の目標設定と考えている人が錯綜している。学校教育法第72条を達成するために自立活動の指導が設けられている。私は、自立活動があるから特別支援学校だと理解している。だからこそ、自立活動をなおざりにはできない。

- 自立活動の解説の第2章の2から

知的障害者である幼児児童生徒に対する教育を行う特別支援学校に在学する幼児児童生徒には、全般的な知的発達の程度や適応行動の状態に比較して、言語、運動、情緒、行動等の特定の分野に、顕著な発達の遅れや特に配慮を必要とする様々な状態が知的障害に随伴して見られる。そのような障害の状態による困難の改善等を図るためには、自立活動の指導を効果的に行う必要がある。

ここでいう顕著な発達の遅れや特に配慮を必要とする様々な状態とは、例えば、言語や運動の面でいえば、「理解言語の程度に比較して、表出言語が極めて少ない」、「全体的な身体機能の発達の程度に比較して、特に平衡感覚が未熟である」などである。また、情緒や行動等の面で言えば、例えば、「心理状態が不安定になり、パニックになりやすい」、「極めて動きが多く、注意集中が困難である」と書いてあ

る。知的障害でいう自立活動はどんなことを取り扱っていけばいいのかというのは、以前言われていたことは、発達のはずみや偏りといった部分になる。個人内差が非常に大きな部分、調和的な発達が阻害されている原因になっている部分を自立活動で指導を行う。

○自立活動の目標設定について

「複数の目で話し合って検討」 「成長の一番の阻害要因は何か」

「改善、獲得されたら生活がもっと豊かになること」 「教科等の指導内容が達成されやすくなることは何か」などの事項を大切にしてほしい。

一度立てた指導計画も一年間通さなければならないというわけではなく、PDCAの繰り返しでよいと思う。複数の目で確認しながら日々修正して取り組んでほしい。

お知らせ 1

全特連青森大会 第20分科会 学校経営 期日：10月27日、28日

魅力ある教育を支える学校経営の在り方 ～子どもたちが安全に安心して学べる学校づくり～と題して、佐世保特別支援学校の西岡哲夫校長先生が、前任校である島原特別支援学校での以下の実践を発表されました。

- 1 子どもたちの命を守るための取組～危機管理～（地震津波災害対策、不審者対策について）
- 2 子どもたちにとって学び甲斐のある学校にするための取組～専門性の向上～

お知らせ 2

『全特連功労者表彰』

全日本特別支援教育研究連盟全国大会（青森大会）において、前佐世保特別支援学校校長の中村敦先生が平成28年度全特連功労者表彰を受賞されました。
おめでとうございます！！